

# 鈴木あつこ NEWS

SUZUKI ATSUKO

群馬県議会議員

2024. 2

vol.11



2024年も皆さまにとって幸多き一年となりますよう心よりお祈り申し上げます。

いつも大変お世話になっております。

能登半島地震や羽田空港での事故など、年明けからつらい出来事が相次ぎました。亡くなられた方々に謹んで哀悼の意を表します。被災地では厳しい寒さの中、水も電気も使えず、食事も満足になく、不安な日々を過ごしている人たちが今も大勢いることを想像すると、胸が苦しくなります。現地の皆さまが一日も早く安心して暮らせるよう願っています。

群馬県内からは各消防局・本部の緊急消防援助隊や、病院のDMAT（災害派遣医療チーム）、DPAT（災害派遣精神医療チーム）などが派遣され活躍しました。困った時はお互い様、明日は我が身です。私は自分にできる支援を考え続けてまいります。

それにしても、プライバシーがない避難所生活、不衛生なトイレ、子どもや女性が身の危険を感じる環境…。阪神大震災や東日本大震災の教訓が十分に生かされているのか疑問です。喉元過ぎれば熱さを忘れる、とは、このことでしょうか。

たとえ非常時であっても、「命」と同様に「人権」や「人としての尊厳」が守られるよう、平時から準備しておくことが大切です。むしろ平時にこそ、あらゆる状況を想定して対策を打っておくべきだと改めて実感しました。



※お預かりした募金は全額、日本赤十字社へ寄付いたしました。

**命と人権が守られる社会、思いやりのある政治を実現させるために今年も頑張ります。どうぞよろしく願いいたします。**

## インクルーシブ社会へ前進！



「インクルーシブぐんま」設立記念タウンミーティングを開催しました。

インクルーシブ (inclusive) とは「包摂的な、包括的な、すべてを包み込む」、対義語はエクスクルーシブ (exclusive) で「排除的な、排他的な」を意味します。障がいの有無や国籍、年齢、性別などに関係なく、違いを認め合い、共生することを目指す社会をインクルーシブ社会、教育の仕組みにおいてはインクルーシブ教育と呼ばれています。

今回のタウンミーティングでは、東京大学大学院の小国喜弘教授（教育学）や、「東京インクルーシブ教育プロジェクト」「笑って子育てロリポップ」「ココフリ群馬」「DPI日本会議」など様々な障がい者関係団体の皆さんと共に参加しました。

現在、日本では障がいの有無や種類・程度に応じて特別支援学校・学級に通うのが一般的です。少人数で専門的な教育や支援を受けられる反面、地域の学校や通常学級とは分離・隔離された状態とも言えます。国連の障害者権利委員会はこうした「分離教育」をやめるよう勧告を出しています。

一方で、昨今、不登校の児童生徒や精神的な病から休職する先生が過去最多となっています。子どもにとっても先生にとっても、学校が息苦しい、楽しくない場所になってしまっているのかもしれない。この状況から脱するには、インクルーシブ教育が一つの突破口になると私は考えています。なぜなら多様性のある環境で、「みんな違ってみんないい」の感覚や助け合いの気持ち、ごく自然に備わりやすいからです。同調圧力や過度な競争主義にとらわれず、誰もが自分らしく過ごせる学校が、今、必要とされているのではないのでしょうか。

東京都三鷹市立第三中学校を見学しました。バリアフリーの校舎で、医療的ケアが必要な生徒が通常学級で授業を受け、給食の時間を過ごしていました。スキー教室や修学旅行もクラスメイトと共に楽しんだそうです。普段から一緒に過ごしていればこそ人間関係だと感じました。

ただし、私は「特別支援教育」を否定する意図は全くありません。現場で一人一人に最適な教育をするために情熱を注いでいる先生方を尊敬しています。特別支援学校・学級にいる子どもたちや保護者の思いもしっかり尊重いたします。





# 「人」重視の施策を！

会派から知事に政策提言を行いました！

32項目の要望を提出しました。医療・福祉の充実、財政健全化、ジェンダー平等、多様性の尊重、持続可能な農業施策など、「リベラル群馬」ならではの視点が盛り込まれています。知事の肝いり政策である「ぐんまちゃん」のプロモーションについては、毎年3～4億円規模の巨額投資の費用対効果を考え、知名度が十分アップしたため一定の役割を果たしたとして終了するよう求めました。しかし、知事はまだ続けたいという意向でした。残念です。

私からは特に、学校の教員が児童生徒と向き合える時間を確保できるよう、保護者とのトラブルやいじめ等が発生した時に相談を受け付ける「スクールロイヤー（弁護士）」の必要性を訴えました。また、ハンセン病の普及啓発に向けて、草津町にある国立ハンセン病療養施設「栗生楽泉園」や重監房資料館を活用した人権教育の推進を求めました。



## 高校生や大学生と意見交換

渋川女子高校や太田東高校での出前講座「GACHi (ガチ) 高校生×(かける) 県議会議員」、大学生等との意見交換会「ぐんまシズンシップ・アカデミー」などに参加しました。いずれも若者の政治への関心を高めるための取組です。

高校生からは「なぜ県議を目指したの?」「特に力を入れたい政策は?」「大学授業料無償化についてどう思う?」「公共交通を充実させてほしい」などのさまざまな質問や要望をいただき、改めて身が引き締まりました。大学生からも、地域経済に関する疑問や県議会（政治）と暮らしのつながりなど本質的な質問が多く、また投票率アップに向けた意見交換ができて、とても勉強になりました。



## 「Kuragano松市」復活！

地元の有志と共に倉賀野神社をお借りし、正月用の松飾り等を販売する松市を復活させました。上毛新聞にも掲載していただきました。

## 「女性」の目線で政策提言

県内の超党派の女性議員で構成される「ぐんま女性議員政策会議」からも、知事に政策要望を提出しました。

県立高校の男女共学化、子育てや介護施策の充実など42項目。加えて私からは男女の賃金・処遇の格差解消を強く求めました。女性の経済力向上が「子どもの貧困」の解消、さらには児童虐待の予防にも繋がるためです。

## 「マッチョ政治」にさよなら

女性議員が圧倒的に少なく、国際的な指標でジェンダーギャップ指数が146カ国中125位の日本。声や権力の大きさで政策の優先順位が決まる現状を脱却し、女性や少数者の声をもっと反映される社会をつくるために、「フェミブリッジアクション」を党派や所属団体の垣根を超えて行っています。

私は選択的夫婦別姓がまだに認められないことや、非正規労働者に女性が多い現状などを問題提起しました。

原則として、毎月第2日曜日の午後0時半から、高崎駅西口のペデストリアンデッキで実施中。ご自由にご参加ください。

## 小規模でもキラリと光る高校を！

少子化に加え、県内外の私立高校の人気上昇に伴い県立高校は約半数が定員割れする事態が続いています。各校の魅力度アップや、その魅力の発信力アップ、地元との連携等が課題となっています。“海なし県”で珍しい水産コースがある万場高校（神流町）をお邪魔し、ユニークな活動や特色ある授業内容について教えてもらいました。

## 略歴 鈴木 敦子

1981年生まれ  
派遣社員を経て毎日新聞記者として勤務  
2021年 県議初当選  
奈良女子大学卒業  
家族は夫・娘・息子（中学生と小学生）

公式HP



SNS



## 活動報告

鈴木あつこ後援会のお知らせ（会員・ボランティアを募集しております）

多様性にあふれた後援会です ☺



ポスティング



座談会の開催



チラシ折込



SNS拡散



街頭活動支援



ポスター貼付

